



現代日本文學大系

90

島尾敏雄 安岡章太郎 集
小島信夫 吉行淳之介

筑摩書房

現代日本文學大系 90

昭和四十七年十月五日
昭和四十九年一月三十日

初版第一刷発行
初版第二刷発行

島尾敏雄 安岡章太郎 集
小島信夫 吉行淳之介

著者
島尾敏雄
小島信夫
安岡章太郎
吉行淳之介

発行者
井上達三

発行所
東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一
電話東京(二九)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷 株式会社 精興社
製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0393 (製品) 10090 (出版社) 4604

目次

巻頭写真
筆蹟

島尾敏雄集

夢の中の日常

徳之島航海記

われ深きふちより

死の棘

島へ

小島信夫集

小銃

吃音学院

殉教

馬

アメリカン・スクール

十字街頭

返照

安岡章太郎集

海辺の光景

ガラスの靴

愛玩

ハウス・ガード

サアカスの馬

三

三

三

四

五

七

八

三

四

七

五

七

七

三

三

三

三

驢馬の声

二五

安岡章太郎

小島信夫 二九

質屋の女房

二六

吉行淳之介

安岡章太郎 三〇

家族団欒図

二六

吉行淳之介集

原色の街

二七

薔薇販売人

二八

驟雨

二八

娼婦の部屋

二九

不意の出来事

三〇

〔付録〕

島尾敏雄の文学と夢

奥野健男 三九

僕は恥じる

小島信夫 四五

年譜
著作目録

四三
四三

島尾敏雄集

夢の中の
日常

島尾敏雄

夢の中の日常

私はスラム街にある慈善事業団の建物の中にはいつ行つた。その建物の屋上で不良少年達が集團生活をしていると言ふ聞き込みをしたので、私もその仲間に入団しようと考えたからだ。それは何も、私より一廻りも年若い新時代の連中と同じ気分になって生活が出来ると考えた訳ではない。ただ私は最近自分を限定したので、いわばその他の望みがなくなつてしまつたように錯覚したので。つまり自分はノヴェリストであると思ひ込むことに成功した。所が世間で私がノヴェリストを完成した事も発表した事もなかつたから。ただ長い間私は作品を上げようとしていたのだ、と言ふ事は出来た。私は中学に通う年頃から変節し通して、はた目には、はがゆい限りであつたと見える。というのも私が、はつきり自分がノヴェリストになるのだという事を表現することを恥ずかしがつていたからだ。自分がまだどうにでもなる余地が残っているとたかをくくつていたからだ。所が三十を過ぎても何一つ技術を身につけていないことを知つた時に私は慄然とした気分になつた。こんなに色々なものが進歩してしまつた世の中で、技術を一つも持っていないという事は寧ろ罪悪であるようにさえ思われた。苦しまぎれに自分にも、とに角三十年近い現世の生活をして来たのだからその内には何か一つ技術らしいものを習得しているだろうという考えに辿りついた。そしてそれがノヴェルを書くうとしていた事に落ち着いた訳だ。そこで一つの作品を完成することに着手した。すると表現という事が重くのしかかつて来て、私は自分の技術を殆んど見限

つた。然しそのことについて絶望ということの時には口にしながらも食事をとり睡眠し排泄して、その間にペン字で埋めた原稿紙を重ねて行つた。そういうことに一年間がまんした。そして出来上つたものはたつた百二十枚しかなかった。自分で読み返してみるとそれはひどく不明瞭なものであつた。文字を重ねて行つただけで、神の寵愛も悪魔の加担も認められない。文字の集積という点にしても貧弱なものだ。所がその百二十枚が買上げられることになつた。そんなことがあるものだろうか。私はそれは一種の茶番ではないかと疑つた位だ。大したことじゃないのだ。それは君、一杯のカルピスだよと教えて呉れるような人がいた。そして又それを私に取ついで呉れる人もいた。そしてそれを私も段々信じて行つた。そのこととどう結びつくのか分らないが、それと同時に私は自分をノヴェリストとして夢想し始めた。原稿料はどの位貰ひ、又私の書いたものは華々しく批評されて、私は技術を持ったひとかどの人物として、先ず手近の肉親から信用し始められて追々に世間に及ぼされて行くのだろう。所で私は私の表現の源泉を百二十枚にすつかり安売りしてしまつたあと、書く事が何もないのに気がついた。それでどうしてもその書くことを育てなければならぬに立場に立至つた。然し私は方々の出版社や雑誌社から、有名な人のように注文が押寄せて来た訳ではない。何やら自分で、そんな風にせかせかし始めていたに過ぎない。あたかもそんな気分の時に私は、へんに私にとっては暗示的な一つの映画を見た。それは第一作が発表されただけのノヴェリストなのだが、その次に書く事がなくなつてしまつたのだ。そして表現を錬金する白々しさに堪えられず酒精の盃の中にすべり込んでしまふという物語であつた。そんなことはあるまいと私は思ったが、怠惰の美味がしのびよつて来て、どうしてもその誘惑に打勝つことが出来ないような時に酒精は私を誘拐しようとして近寄つて来た。

そこで私はそれに抗うようにして機嫌のよい日にスラム街にやつて来たのだ。

私のつもりでは、私も不良少年団の一員となって、すりや強盗なども実際にやってみ、戦争後に一番思い切つて悪くなつてしまつたと言われるはたち前後の少女とも仲よくして、彼女の酔っぱい思春期を無理無理もぎとつてしまおうなどという悪い趣味も抜目なく用意して行つた。私自身はノヴェリストという仕掛を施したのだから、どんなになつても傷つきやうがないという安心感を持つていたと思ひ込んだ。そうやつてむき出しの両刃にして置けば、逆にヒューマニズムの実践者にされそうな陥穽も用意してあつたのだ。そしてその生活の記録とフィクションは私の第二作となるであらう。私はその生活にはいろいろなうちに色々な期待やら計画やら素晴らしい思ひつきやら、なまなましい細部などで作品の出来上らない前から、既に出来上つていような気分が少しづつ湧いていた。ただそれを表現するという沙漠のような砂をかむ思ひに間歇的に打ちのめされはしたけれども。

屋上では、と言つても実はその建物の三階で、戦争中の爆撃の為に、鉄筋コンクリートの外部文が辛うじて残り、内部は部屋の区劃などもすつとんでしまつて、大講堂のようながらんどろになつてゐる。むき出した鉄骨が天井からぶら下つていたり、コンクリートの破片が、そこから一面ちらかり、ガラスも何もなくなつた、大きな破れ穴のような窓からは港の海が眺められた。そんな場所に、団長が二十人ばかりの団員を集めて集會してゐた。それは今後の仕事の打合せや、度胸のない仲間の批判や、追跡に対する作戦などが問題になるのであると思われた。

私は、くずれた階段を、しめっぽく上つて行つて、そつと一番うしろに行んだ。団長には新らしく入団する了解は得てあつた。私は一種の客分で、又彼等の生活のどんな事をノヴェルというものに仕組んでも差支えないという保証も得てゐた。ただ私は彼等に対する説教者ではなく、寧ろ彼等の側に近い精神状態にあり、彼等と違ふ点は、かなりの年配であることかつて正当な学問の教育を受けたことがあるということに過ぎないのだという巧妙な位置を当然に要求する事が出来

ていた。それは彼等を包容してゐる慈善事業団の性質とも関係した事であつた。私はその慈善事業団の性格をはつきり把握する事に困難を感ずる。見当はつくような氣もしてゐたが、どうもはつきりしなかつた。私の知つてゐるその経営者たちのうちの二、三人は、私とは極く親しい間柄であつたが、腹の底を打ちあけて言えば、お互いにしんから憎みあつてゐたやうなものだ。それで私もその施設を利用してゐるだけなのだ。

団長は二十歳を出たばかりと思われる美少年であつた。彼の態度は出来るだけ不法法に振舞つて人をよせつけない所を見せ、口をひらいて自分を批判する時には、ことごとくに自分が、ひ弱く消極的で礼儀作法や習慣をどうしても破ることが出来ない古い形の間人であるといふことを、はにかんで語つた。

その少年団長が丁度何かしゃべろうとした時であつた。私は階下から受付の者が上つて来て、今あなたを尋ねて来た人がいるから、すぐ階下迄来て下さいという知らせを受けた。私はふと不吉なものを感じた。折角新しい生活に切り出そうとしてゐる矢先に、私が受付から呼び戻されたのだ。私は階下を下りて行つた。

受付の所には私の小学校時代の友達がゐた。然しその友達とはそれ程仲が良かったという訳でもない。それなのに私はすつかり動揺してしまつた。何故小学校時代の友達というものは、この様に落着かない氣持にさせるものか。おまけに彼は今悪い病氣にかかつてゐるという噂をきいてゐた。彼がその病氣にかかつてゐるらしい事をきいた後でも私は彼と二、三回町の中ですれ違つた事を覚えてゐる。その時私はいかにも昔のままの友情を今も交りなく持つてゐるといふ顔付や態度を殊更に、彼に示して見せてゐた。その手前、今も彼にそつ氣なく応

対する事が出来そうもなかつた。悪い病氣といふのはレブラであつた。「近頃素晴らしい事業に関係してゐるそうじゃないか」私の姿を認めると彼は、おどおどした調子で話しかけて来た。「そ

れに、小説が一流雑誌に出るんだってね」

私はすっかり自分を失っていた。その精神生活については何も知る事のない第三者から自分の仕事に関して何か話題にされるといふ事は我慢のならないことだった。それに彼が小説という発音をした時に何か、とてもげすな感じがした。まして小学校の時の級友であったといふ事は、私をすっかりどきまぎさせてしまった訳だ。

「君、いつかこれが欲しいと言っていただろう」

彼はポケットから袋をとり出して見せた。然し彼の右手は如何にも不自然に、だぶだぶの上衣の袖口にかくして、袋だけをぶらぶらさせて見せた。私はそれが何であるかを知った。それはゴム製の器具だ。私はいつ彼にそんなものをたのんだのだろう。然しはつきりたのまなかつたと言ふことも出来なかつた。

「ああそう、わざわざありがとう。それでいくら渡せばいいの」

私は早く彼に帰って貰いたかつた。所が彼はひどくじじしながら、その袋をあけて、中の器具をつまみ出した。私ははつきりしない混濁した憤りがじわっと胃のふにはびこり出したのを感じた。彼のような病氣を持った者がどうして隔離されないのだろうか。而も何故彼は、じかにそのゴム製品のようなものを彼の病患の手で触つてみるようなことをするのだろうか。然しそれにも増して私が参つたのは、そういう事態を眼の前にして、私は彼の行為を非難する勇氣のなかつたことだ。その勇氣がないことに私はつまり彼を拒否することも出来なかつた。

彼はそのゴムをさすったり引伸したりしながらこう言つた。

「この頃すっかり品物が悪くなつてね。昔のように丈夫なもののじゃないんだ。すぐ破れてしまうかも知れんよ。」

そして、一枚一枚たんねんに検査し始めたのだ。その時の私の状態はどう言つたらよいのだろう。ひどい侮辱の中に浸つて、時の経過を待っていた。

やがて彼はしつかり袋の中に納め終つて、その袋を私に渡して呉れ

た。私は彼の指にふれない為に、その紙の袋の端をつまむようにして受取つた。そして私は百円紙幣を一枚、矢張り端をつまむようにして彼の指の傍に持つて行つた。

「それじゃ、これを取つて呉れ。又そのうちに上等品があつたら持つて来て呉れないか」私は口をゆがめてそんなお世辞まで言つた。

彼は無造作に指を押しかぶせるように紙幣を受取ろうとした。私はすっかり彼に悪意のあることを感じとつたので、今度は少し露骨に手をひつこめた。

「じゃ、いづれ。今日は一寸会合があるものだから失敬するよ」

私は素早く彼の前を脱れた。彼の全身からにじみ出ている湿氣のようなものは一体何だろう。私は事務室にはいつて、昇来水を金だらいにたらしめてそれを水で割つた。そして私は袋と一緒に両手をその消毒水の中につつ込んだ。それは殆んど本能的にそういう動作をした。その時ぎいっと扉があいた。私は手を金だらいにつけたまま、ぎよつとして扉の方を振り返つた。其処にはレブラ患者の彼が、嫉妬に燃え狂つた眼付をしてつ立つていた。何というのだろうか。さつき迄彼の顔面にはまだ病状は現われていなかったのに、今の彼の眼の廻りには既にどす黒い肉のただれがくまどつていてではないか。彼は消毒液の中の私の両手に、いやな凝視をそそいでいたが、やがて甲高い泣出すような声を出して叫んだ。

「あんたも、あんたも、やつぱりそうだったのか」

彼はやにわに近づいて来た。

「畜生、みんな膿物だ。俺はうつしてやる。あんたに俺の業病をうつしてやるのだ」

私はテーブルを楯にして逃げた。彼は真つ黒になつて追っかけて来た。するとそのさわぎをききつけて、受付の少女が部屋にはいつて来た。彼はきつとなつてそつちを振向いた。そこには少女がげげんな顔付で立つていた。

「くそ、誰だつて容赦はしないんだ。誰だつてかまわないんだ」

いたいとは思わない。そしてあれは何処に見失ってしまったものか。あのいやな出来事のあった日以来、この町での唯一の私の世間への交際場であったあの慈善事業団の建物にもぶつりと近づかなかつたから、私はこの町で友人という者が一人もいなくなった。私の父や、母は何処に居るのだろうか。私は父を見失い、母をも見失っていた。それは少し誇張した言い方であったかも知れない。私は、父の居所を知る事は出来なかつたが、母の居所は大凡分っていた。母は戦争中に壊滅してしまつたと伝えられる南方の町に住んでいた筈であつた。そして新聞紙などでは全滅してしまつたように伝えられたけれど、実際に行つて見なければ分つたものではない。それだから私は母の居所の見当はついていたら共生ききているのか死んでいるのか分らなかつたのだ。そして父は、恐らくは私と母とを探しているのではないかと思われた。私は突如その南方の町へ行つて見ようと思つた。それは母に会いたいと言うのでもなかつた。母の生死を確かめたいと言うのでもないようだ。私はぐらりとそちらの方へ身体を移した。

其処はまぎれもなく、その南方の町のようなのだ。それは前に見馴れていた馴染みの町の様子とは少し違ふようだが、明らかに私はその町にふみ込んでいた。すると町は全滅した訳ではなかつたのだ。私は町なかを歩き廻つた。母の実家はずっと以前に断絶してしまつてはいたが、私の母はこの町で生まれたのだ。それで以前私はしばらく此の町に住んでいた事があつた。然し今となつては私が身体を休めるような場所は一つとして残つていそうもない。いくら知っていた家も代がわりをしてしまつていた。それでも私はごく当り前に母の家に行きつく事を信じていた。

私は町の中をうろついた揚句に、ひょっこり町のさい果てであり、電車の終点でもあるターミナルに出て来た。夕暮れなのか、既に夜にはいつたのか、辺りは馬鹿に暗い。私は立止まつた。すると一度に色色の事が甦つて来た。私はまるで雲をつかむように構想もなく、デバ

ートや理髪屋の明るい人だかりの中を通過して来ていたのだが、その暗いターミナルの背後を囲んだ立体的な丘陵住宅の風景を感じとつてある事を思い出したのだ。私は行く場所の見当がついた。私は郊外電車に乗つて或る場所に行けばよかつたのだ。そしてその場所こそは新聞などで壊滅したと言われていた場所に違ひなかつた。

そのターミナルから北の方の闇に向つて、鉄道が敷設されているようであつた。その軌道が、どこをどう通つてどういう町々を連ねているものかは一向に分らなかつたがただそちらの方に行けば、丘陵も建物も灰になつてとろけるように崩れ落ちた平面の感じがする或る区域に、その場所があるようであつた。そして私はしきりに心配事の種が心臓の辺でうずき出しているのを感じた。私は早く其処に行かなければならない。

風が吹き始めた。ターミナルの路傍で私は切符売りの婆さんから切符を買つた。高い電柱のてっぺんの方で裸電球がつけ根がゆるんでぶらぶらしながら切符売りの婆さんとその箱のような居場所を明るく区切つていた。私が最後の切符の求め手であつたかのように婆さんはそそくさとその箱の店をたたみかけたので、私もあわてて電車に乗込んだ。

電車は混んでいた。だが私は押分けてはいつて行つた。真ん中あたりの釣り革にぶら下つて魚のように呼吸していると、必ず座席がとれるだらうという気がしたのだ。するとその通りになると、私のすぐ目の前には、如何にも娘ざかりの肉付のいい若い女が銘仙の着物を着て坐つていた。鼻が平たくて気になつたが小ぶとりの身体つきに妙に惹かれるものを感じた。近郊の在から出て来てそう日もたつていないような風だ。私は眼でその娘の身体に小料理屋の女のあくどい柄のはでな着物を着てみた。すると私はがまんもしきれない子供のような慾望を感じ出した。そこで私はその娘の横の座席にしつこい執着を示したので娘は仕方なさそうに横につめた。その大儀そうな仕種は醜いも

のだったが私にはひどく挑撥して来た。もう手中の小鳥を料理する気分になつてた。

私は自分とは別の人間の柔軟な体温のぬくもりを感じていた。その別の人間である女が少しでも身体を動かせると、私は自分の肉体の曲線がまざまざと伝わり、その女の肉体との境界の線をあからさまに知らされた。そうすると私は少し煙草をのみ過ぎた時のように眼がかすんで来た。そして私の肉体がもうあの時から崩れ始めて駄目になつてゐるような感じにとらわれた。と同時に私はその娘も充分意識して饗宴に与つてゐることを確信していた。それで先のこととは考える余裕もなく、刻々が重なつて未知の時間に移つて行く刹那がそこにあった。私は自分の膝でその娘の膝の辺の括約筋の色々な方向を数え始めた。

すると娘はついと膝を外した。何ということだろう。私は突然平手打ちを喰わされたように狼狽した。私は自分の肉体の不随意な神経をひどく残念に思った。その娘は私の性根を白々した気持で計算して、つとそのぬくもりを外したに違いないのだ。私は猛然と鬪争の心が起つた。先ず手はじめに、非常に侮蔑された気味合を充分に現わして、いと顔をそむけてみせた。すると、半ばそういう期待もあつたのだが、娘がおろおろし出したのだ。私はいささか拍子抜けがして娘の方をながし目に見た。私が身体をそらし加減にしてぐいと膝を押しつけていたものだから娘の膝が乱れて不ざまになつたのであつた。娘はその膝をつくろおうとしたのだ。娘は身体をよせて来て、

「御免なさい。そんなに怒つてはいやです。仕方がなかつたのだ」と言つた。それはまるで他人でないような調子だ。私はこの変な葛藤には負けような気がした。と同時にその娘の肉声をきいただけでいやな気持になつて、正氣づいてしまった。そこで私は思いきりぶつりとこの遊戯の糸を切つてしまふことにした。そして甘つたるいだらけきつた余韻の中で、私はいつの間にか、或る家の中に居たのだ。

そこは絶滅したかもしれないと思つていた場所の一劃であつた。何

かのいたずらでその家は残つていた。そこは私の母の家であつた。そして私はどこからか、父を無理矢理にこの母の家に引張つて来ていることに気がついた。そうだ、私は此処に来る途中何処か身体に束縛を感じていた。それは私一人でない何者かが私の影となり身体につきまといつていたのだ。それは私の父であつたのだ。此の家にはいつて、はつきり私の父であることが決定したようであつた。

私はもう其処に住み込むつもりで、畳の上を歩き廻つて部屋部屋をのぞいてみたり、裏の縁側に立つて板塀越しに隣りの家の方をのぞいてみたりした。猫の額のように狭い不潔な庭には枇杷の木が一本植わつてゐた。その黒っぽい色素の枇杷の葉が一枚一枚ゴム細工のようなぼつたりした重量でいやにはつきりと眼に写つた。畳はぶよぶよふくれ上りほこりっぽく、ねだかゆるんで歩くときみしししわつた。天井板は全部取外してあるので屋根裏の骨組みが蜘蛛の巣だらけで、電燈のコードが張り渡されて眼ざわりであつた。壊滅からは免がれたといふものの、やはりあの一瞬の閃光の時にこの家全体に癒すことのないひびがはいつてしまつたことが見てとれた。部屋は、ひどく陰気なのだ。母がよくこんな所に住んでいられたものだと思つた。

「畳はずい分きたないね。僕はこんなのは大嫌いさ。僕が来た以上は、うんときれいにする」

私は大きな声で少しあてつづけに、うんとと言ふ所に力を入れてそう言い、言つたあとの自分の言葉でふいと私は母が何か不潔なような思ひを抱いた。私が大声でそんな事を言つたのには一寸したからくりがあつた。そんなに言うことによつて、母の今までのこの家でのふしだらな生活をわざときめつけることになると思つた。そうすれば私は父の御気嫌を伺い、併せて母としても父に對していくらか肩の張りがとれて気易くなる事が出来るだろうと思つた。その結果は父に對しては上乘であつたようだ。然し母に對してはすこし効き過ぎたような悲しさに襲われた。

私は母はもつと年をとつてゐると思つていた。然し今見るとまだ仲

仲瑞々しさが残っているようだ。だらしなく猫じゃらしに結んだ伊達巻の小粋になまめになった腰のあたりがどうかするとなまめいてさえ見えた。母は不義の混血児を負ぶっていた。その白っ子のような男の子は、私は前々から母の生れた町でちよいちよい見かけていたことを思い出した。年の割にのろっと大きな感じの子で、そんな大きな子を母が負ぶっている気が分らなかつた。思うに父の黒い眼の前ではどう隠しようもなく、いっそ身体につけてしまったのかも知れない。私は町の路上で遊んでいたその混血児が、実は自分の母の不しまつた結果であることは、今度此の家に来て始めて知った。でも私はその事に少しもおどろかなかつた。一さいがそうだったろうと前から分っていたような気持になつていた。いや寧ろこんな誠に小説的な環境が、この自分のものであったということに、訳の分らぬ張合いが起つて来た。自分の根性を素手で擱んだ気持でいた。そうだ。私はノヴェリストとして自分を限定してしまつたのではなかつたか。

母は父がやつて来た手前いくらかやぶれかぶれでふてくされて見たいに見えた。父が何か言えばそれに答えて伝法にぼんと言ひ返しをやりかねない風情に見えた。然し私には、そんなのろつとした白っぽい異人の子を負ぶって父に応対しているということ、女が運命に逆らうことの出来ない自然さで、母がもうおろおろしきっているように映つた。私はそういう自分の甘さについて、うっかり、

「お母さん大丈夫ですよ。この子は立派に、私の弟です」

と言つてしまつた。その瞬間私は自分で自分の言つたことにセンチメンタルになつて、胸がつまり、ヒロイックですらあつた。母とその混血児は、涙ぐむだろう。その時の腹の底では、もし父が反対しても、私は自分に自信があるような気がしてゐた。私は瞬間瞬間の私の感情的な反応を信じない決心をしてゐたのだ。それはあの日以来そうなつてゐたのだ。

父はすべてを黙つて見てゐた。私のそのへんてこな自信をも含めて、見ていて、甚だ不愉快そうであつた。私には父の肉体は感じられない。

私が父をこの母の家に連れて来たのだが、父には殆んど位置というものが無い。而も私は明らかに母に対して父をこの場所に位置させていた。敵として、父らしい気配がそこに存在した。そしてその気配が不愉快そうな様子をした。

父は言つた。

「その他に、女の子も又別に二人の子供もいるのだ」

そうぼつりと言つた。それ文言つたのであるが、私にはその出された言葉より、余音となつて消えた「お前は知るまい」という出されぬ言葉が、びしりと胸に來た。父が口に出して言わない後の方の言葉が現に出された言葉よりもなまなましく私の胸に焼きついた。私はその父の姿に醜くたじろいだ。然しうちの者は怪我ひとつしないう言のうが戦争前までの私の現実だつたのだ。それが今日此頃はどうかう。こんななぎつしり不幸が矢つぎ早にやつて來た。私はもう自分が何であるか分らない。うわあ、何と素晴らしいことだ。之がみんな俺の現実なのだ。そういう気持が瘡のようにはびこり出してゐた私に、父の今の一言はびしりと來た。私には父がゆるぎのない世間の鉄の壁に見えた。

「その位のこととは前から知つていました」私はか弱い追従の笑いを浮べて、とにかく父に言い返した。拭うことのない罪惡のように仮借なくきめつけられた私の甘さを、どんなにしても繕ひたかつた。

お父さん、本当は私はレブラにかかつてゐるのですよ。私はどんな現実にも驚かない私だという虚栄を満足させたかつた。然しその結果は、父と母との人間的な不和に対して私風情が到底どうすることも出来ないことを思い知らされたに過ぎなかつた。

「……………」

父は又何か言つた。

それは怖ろしい言葉だつた。私はその言葉をきいた時は、私の皮膚は母の皮膚の一部ではなかつたらうかと思つた。その皮膚にはっきり地獄をのぞき見させた言葉だつた。

母はそれに何ごとか言おうとした。母が何ごとか言わなければ世界の平衡がとれないで甚だ宙ぶらりんになる。早く母は何か言わなければならぬ。父の口から吐かれた瓦斯体のものを母の口からの別の瓦斯体によって、中和させるか何かしなければ、此の廃墟のただ中に奇妙に取残された或る地点を中心にしてこの国全体が崩壊しそうであった。所が母はお盆のようなものを畳の上に置いた。母が父に向って何か言う時には、その言葉に嘘が少しもないことを示すために、一種の踏絵の儀式を行う約束になっていたと見える。そのお盆には肖像画が画かれてあったのだらう。丁度裏返しになっていたのだから出て来なかつたが、その肖像は誰のものだったらうか。私はその肖像の主を異常な執心で見たいと思った。母はつと裾をからげてその盆の上を踏んだ。私はそれが私の母であることを疑った程、なまめかしい姿態であった。私はこの極端に尖鋭化してしまつた、今の瞬間が、和解の絶好の機会だと直感した。私は殆んど祈りたいような気持ちになつてゐた。

然し、何と云うことだ。母が口走つたのは、母の情人、その西洋の男に対する真実の信頼の言葉であつた。

父は激怒した。父の感情の波は、私にそくそくと伝つた。私も父と共に激怒した。然し又同時に私は父の精神の破局を甚だ小気味よいものと思つた。父は鞭をとりあげて母を打とうとした。すると私には又甘いヒロイックな気持が起つた。私は父に母の代りに父のせつかんと受けることを申し出た。父は始めなかなかえんじなかつた。その父の表情は青ざめた真面目なものであつた。私はその父の顔を見ると更に執拗に母の身代りを繰返した。私のその真剣なやり方は我ながら真に迫つたものがあつた。父は遂に承知した。だが父は口もとに冷たい微笑をうつつら浮べていた。

私は父の鞭を受けた。

それは物凄いなものであつた。私は殆んど失神せんばかりであつた。父は石の如く憎悪の極に立つていた。私は何かを甘く見過ぎていたこ

とを手ひどく思い知つたが、死んでもそのせつかに悲鳴をあげることはないであらうと思つた。鞭が終ると、棍棒のようなもので私は顔をたたかなくぐられていた。

やがて私はその家の外にいた。口の中は歯がぼろぼろにかけてしまつた。手でいくらつまみ出しても、口の中には歯の粉碎された粉がセメントの様に残つた。私は自分の口をまるでばつたかきりぎりすの口のように感じた。

私は何処を歩いているのだらう。私には一切が分らなくなつた。其処は崩壊してしまつた場所の筈であつた。然し今私が歩いている所は、すつかり家が立ち並んで人々が往来してゐた。

硫黄のにおいがする。そしてその家並は傾斜してゐる。家並に沿つて谷川が流れているようだ。だが私に川は見えない。ただそんな気持ちで歩いてゐる。道には並木が植わつてゐる。之は何の木だらう。桜かも知れない。季節になると眠たげな雲のように桃色の花々が棚びくのであらう。然し今は花はついていないようだ。この家並は湯気のようなもので覆われている。そして硫黄のにおいがする。私はどうしてこんな道を歩いているのだらう。又一夜の宿りの旅館をあれでもない之でもないと探しているのだらうか。道はだんだん下り坂になつてゐる。石ころが多くなつた。人々が往来する。だがみんな影が薄い。あたりがぐらぐら。決して夕方ではないのに。太陽があんなに中天高くかつている。それに暗い。人々はぞろぞろ歩いてゐる。

(かつとまばゆい嘗ての日の真夏の昼の、海浜での部厚い重量感を呉れえ)

私はそんな事を思つて歩いてゐた。私は、あの家に行つてやろうと思つているのだらうか。あてがないふりをして歩いていながら、あてがあるのに違ひないのだ。

人家の家並は間遠になつて、やがて細長い三階建の木造家屋の下を通つた。それで私の気分は陽がかけたように暗さを増した。私は首

をうしろにもたげて家屋の上の方を眺めた。すると窓という窓には一ぱい人の顔が見えた。それは学校の生徒の顔のようだ。私は屈辱で全身がほてった。然し全部の生徒が私を見ている筈もないのだ。私ももう一度よく見ようとした。というより、そちらの方に顔を向けていたのだ。よく見極めるといふような冷静さはなかった。熱を持った眼にうつったのは、たった二、三人の生徒だけが私を見て笑っていたに過ぎないことを了解した。私はそのまま歩いて行った。

(インチキインチキインチキ)

私の気分がささやいた。

(君はね)

又気分がささやいた。

(当って砕けるではなくて、砕けてから当っているんだ)

(それはどういふ意味だ) 私は抗議した。(何を言うつもりなんだ)

すると気分が律動に乗って答えて来た。(お前は此の間、いやにしつこく主張していたぞ。あ、た、っ、て、く、だ、け、ろ)

(そんなくだらない事を主張する訳がない) 私はかぶりを振った。私は道を歩いていた。硫黄のにおいがして来る。

(気分を信用するな)

それは又誰のささやきだろう。

(お前の行く所は分っているよ)

私はどうやら目的の家の玄関に立っていた。

「一晚とめてくれえ」

私は女の部屋に通った。

(それ、お前のさわりだ。しっかりやれ、同んなじ調子)

格子窓につかまって外を見ている子供がいた。

「駄目なのよ、その子」

女が私の背中の方で、気配を見せながら言った。

「駄目って、どう？」

「もう見放されたの、お医者さんに」

私はその子供の傍に近寄ってみた。然し何処が悪いのだろう。ちつとも病氣らしく見えない。私は声をかけた。

「坊や、何を見てるの」

「向う」

子供は透き徹る声で答えた。私は格子窓の向うの景色を感じていた。それは一面の田圃で、今は何も植えてなかった。土は一度掘起されたまま固く凍りついていて、それが眼の届く限り続いていて、一里も先の方に、ちよろちよろと地平線に浮き上って踊っているようなまばらな松林が見えた。そして海鳴りが聞えていた。じつとその方を眺めていると、松林越しに白い波の穂のくだけるのが見えるようであった。

「坊や、海が見えるねえ。おじちゃんがだっこしてやろう」

私はその子供を抱いた。殆んど重みというものが無い。私は勇気を失った。すると子供は私に抱かれるのを待ち構えていたようにけいれんを起し始めた。私は子供をそつと下におろした。

「駄目らしいね」

私は女に言った。私は頭がかゆくて仕方がなかった。それで指を髪の中に突っ込んで、ぼりぼりかいた。そして部屋の隅に置いてある鏡台の前に坐った。すると其処に新刊の雑誌がのっかっていた。女はすすり泣きをしていた。その雑誌は私の最初の作品が載る筈の雑誌ではないか。私は急いでその雑誌をとりあげて、目次を開いて見た。

おお、確かに載っている。私の名前が活字になっている。然し何故私には送って来なかったのだろうか。何を措いても先ず私が見る権利があるのではないか。頭がかゆい。そして首筋の辺りがひどくかゆくなった。それで、かゆい所をひっかいてむしった。

「此の雑誌どうしたの？」

「あら、それ」

女が後ろに来た。

「それに、俺、こんな題名をつけたかしら」

「一寸」

女がびっくりしてつまったような声を出した。「あなた頭どうかしたの。へんなもの、一ぱい」

私は頭に手をやって見た。すると私の頭にはうすいカルシウム煎餅せんぺいのような大きな瘡が一面にはびこっていた。私はぞっとして、頭の血が一ぺんに何処か中心の方に冷却して引込んで行くようないやな感触に襲われた。私はその瘡をはがしてみた。すると簡単にはがれた。然しその後で急激に矢もたてもたまらないかゆさに落込んだ。私は我慢がならずにもうでたらめにかきむしった。始めのうちは陶醉したい程氣持がよかった。然しすぐ猛烈なかゆさがやって来た。そしてそれは頭だけでなく、全身にぶーっと吹き上って来るようなかゆさであった。それは止めようがなかった。身体は氷の中につかかっていて首から上を、理髪の後あの生ぬるい髪洗いのように、なめくじに首筋を逼り廻られるいやな感触であった。手を休めると、きのこのようにかさが生えて来た。私は人間を放棄するのではないかという変な氣持の中で、頭の瘡をかきむしった。すると同時に猛烈な腹痛が起った。それは腹の中に石ころを一ぱい詰め込まれた狼おおかみのように、ごろごろした感じで、まともに歩けそうもない。私は思い切って右手を胃袋の中につっ込んだ。そして左手で頭をぼりぼりひっかきながら、右手でぐいぐい腹の中のものをえぐり出そうとした。私は胃の底に核かくのようなものが頑強がんきやうに密着しているのを右手に感じた。それでそれを一所懸命に引っぱり出すと何とした事だ。その核を頂点にして、私の肉体がずるずると引上げられて来たのだ。私はもう、やけくそで引っぱり続けた。そしてその揚句に私は足袋を裏返しにするように、私自身の身体が裏返しになってしまったことを感じた。頭のかゆさも腹痛もなくなっていた。ただ私の外観はいかのようにのっぺり、透き徹とほって見えた。そして私は、さらさらと清い流れの中に沈んでいることを知った。その流れは底の浅い小川で、場所はとも野っ原のっはらのようである。私はさらさらした流れに身体をつけたまま、外部を通し見た所に、何の木か知らないが一本の古木があって、葉は一枚もなく朽ちかけた太い枝々の先

に、鴉からすがくちばしを一ぱい広げて喰いついているのが見えた。それももっとよく見ようとして目をみはると、それも一羽だけでなしに、どの枝の先にも、そのようにくちばしを一ぱい広げてがぶり枝先に喰いついた鴉がうようよしていた。それは丁度貝殻虫かいがらむしのように執拗な感じを与えた。鴉はそのままの姿勢でいつ迄もそうやっていくような氣がした。ただ生きている証拠に、てっぺんに向けた尻しりを時々動かしては、翼をやりわり広げる恰好をした。然しくちばしで葉のない太い枯枝にがっかり喰いついたままであることに変わりはなかった。それで流れの中につかっている私は、その鴉どもを、貝殻虫をむしり取るように、ひっぺがしてやりたいと考えていた。

(昭和二十三年五月)